

正夢彼女

可児高校 P N 寒月 ナツメ

ある朝、通学路で隣りを歩いていた友人Aが突然「彼女ができる夢を見た」と言い出した。現在友人Aに彼女はいない。寂しくてそんな夢を見たのかもしれない。思わず彼を憐憫の目で見てしまい「そんな目で見んな」と睨まれた。

「超リアルな夢でき、オレは彼女と一緒に登校していた」

友人Aが少し先にある自動販売機を指差す。

「そしたらあの自販機を通りすぎた時、いきなり雨が降り出してき。ビックリしたわ」

僕は今朝見た天気予報の今日の降水確率を思い出す。確か二十パーセントだった。

「これ当たったらオレすごくね?!」と隣で騒がしい友人Aに、僕は「そうだね」と軽く答えて自動販売機を通りすぎた。

頬に何かが当たった。見上げると雨が降っていた。

「嘘だろ…」

ポツリポツリと降り始めた雨はまたたく間に激しくなつてゆく。友人Aを振り返ると、彼はドヤ顔で僕に傘を差し出した。

それから友人Aの夢の中の彼女はちよくちよく彼の夢に現れた。「猫の親子とすれちがう」「自販機の横に百円が落ちている」友人Aは夢に彼女が出てくるたびに僕だけにドヤ顔で語ってくる。

「登校中以外の夢は見ないんだ?」

「…学校につくまでに目が覚める」

友人Aが悔しそうに齒軋りする。彼女とデートがしたいらしい。大まじめな友人Aの様子がおかしくて、肩をふるわせて笑っていたら頭をはたかれた。いい音がした。

友人Aが初めて彼女の話をしてから半年経ち、その間に僕と友人Aは高校三年に進級した。友人Aの彼女は週に二、三度彼の夢に現れては当り障りのない正夢を見せ続ける。夢の内容を友人Aは得意気に語り、僕は黙って彼の話に耳を傾ける。

春から夏に変わり、急にセミの鳴き声が耳に付くようになった。友人Aは最近顔を合わせると挨拶の後に「消えされ温暖化」や「冬に戻りたい」と夏に文句タラタラである。ちなみに冬の間は「進め温暖化」だの「夏が恋しい…」だのと言っていた。

そんな友人Aが今日は何も言わなかった。僕の挨拶に対して力無く「おお」とだけだった。変なものでも食べたのだろうか。腹でも痛いのかと尋ねると、友人Aは黙って首を横に振った。友人Aが何も言わないので僕も何も言わない。二人で無言で通学路を歩く。

突然友人Aが僕の制服の袖をつかんで足を止めた。

「なに?」

友人Aはやけに青白い顔でうつむいている。覗き込むと歯をくいしばって地面を見つめていた。

「なんだよ?」

ガシャンッと僕の声に被さるように音が響いた。驚いて前を見ると、以前友人Aが通りすぎる時雨が降ると言っていた自動販売機がトラックにおし潰されていた。どこからか猫の鳴き声が聞こえた。

「彼女が守ってくれた」

視線をトラックから友人Aに戻す。

「猫を避けようとしたトラックがオレたちに突っ込んできて、そしたら彼女がオレをつき飛ばして『バイバイ』って――」

友人Aが僕の袖から、ゆっくりと手を離す。しわになっていた。僕は友人Aの話に耳を傾ける。いつものように。

「もう会えない」

ペチャンコになった自動販売機を見つめて彼は言う。ただ、呆然と。

「もう会えないんだ」

ふいに友人Aが僕を見た。目が合う。

「オレは、彼女のこと、結構本気で好きだったんだよ」

一言一言区切るように彼は言う。僕が知ってる、と言うように頷くと彼は両手で目を覆った。セミの鳴き声と集まってきた人々の喧噪に包まれて、友人Aは静かに泣いていた。